

デンマークにおける視覚リハビリテーション

Center for Specialundervisning - Slagelse

修士(理学)、オプトメトリスト、神経オプトメトリスト

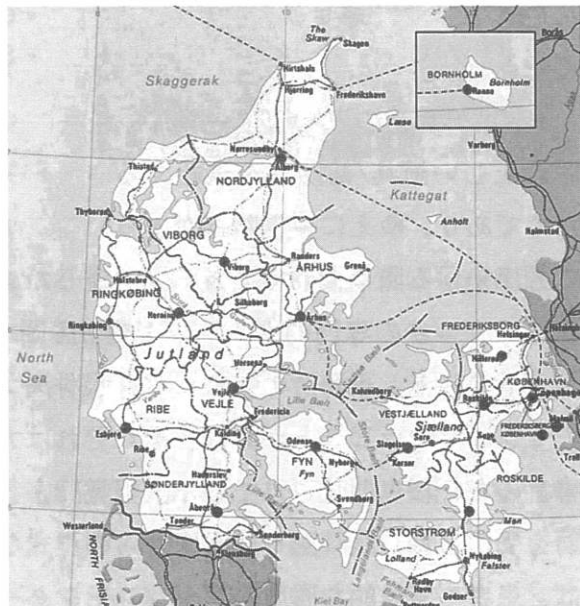
Peter Smaakjær*

日本語訳 日本ライトハウス養成部

田邊 正明**

デンマークでは視覚障害者に対するサービスを提供している施設は公的なものであって政府による税金によって予算化されている。検査、補助具、訓練は無料で、視覚補助具は視覚障害や全盲の人に必要な期間だけ貸し出される。

私はいままで数年間Slagelseの“ビジョンセンター”でオプトメトリストとして働いている。ビジョンセンターは全盲や視覚障害の人が見えにくくなったときに援助を得られる場所である。デンマークでは伝統的に全盲や視覚障害の人の自立ができるように援助しており、18歳以下の先天的な視覚障害は通常は“ケネディセンター”(以前のデンマークの国立眼科診療所)や“視覚障害者施設”へ紹介される。ケネディセンター



* Peter Smaakjær リハビリテーションセンター (スラーエルセ市)

**たなべただあき 日本ライトハウス養成部

はコペンハーゲンにあり、視覚障害者施設もコペンハーゲンにある。地図上にある16の黒い点は14のビジョンセンターと2つのケネディセンターを表している。ビジョンセンターはそれぞれの地域に1か所存在している。しかしながら、もし視覚障害が大人になってから発生した場合、通常はビジョンセンターが必要な援助を供給する。

最初のデンマークのビジョンセンターは1982年に設立され、スウェーデンが視覚障害を負った国民に対して提供するサービスの方法に基づいた。ここではいわゆる3本足モデルが実行され、それは眼科医、オプトメトリスト、ビジョンセラピストが同じ屋根の下で働いていることを意味している。言い換えると、医学、光学、教育の専門的技術間における学際的な連携が行われているということである。

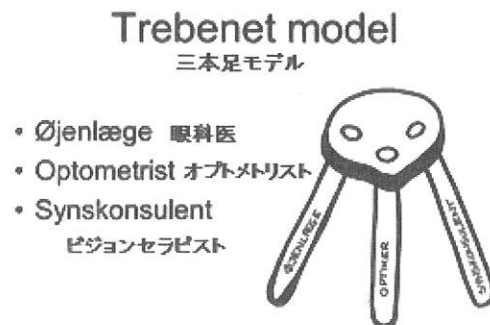
デンマークは550万人の住民がいて約0.5%の視覚障害者が存在する。

デンマークの14か所のビジョンセンターはすべて3本足モデルを実行している。

3本足モデルの考え方は視覚障害者に正しい道具/補助具を供給するためであり、ゆえに視覚障害があっても出来る限り自分でできる。上述したように、ビジョンセンターの職員全体はいくつかの専門的グループで構成されている。ITコンサルタント、オプトメトリスト、事務所のスタッフ、眼科医コンサルタントである。それに加えてビジョンセラピストがおり、それぞれは大人、子供、視覚障害を伴う重複障害者のために専門化されている。視覚障害者はだれでもビジョンセンターの援助を受けられ、眼科医や開業医からの正式な紹介状は必要ではない。請求すれば、患者の医学的な履歴がビジョンセンターの許可を受けたうえで取得できる。

眼科医コンサルタント

眼科医コンサルタントは患者を監督することはなく、眼科医の記録から専門

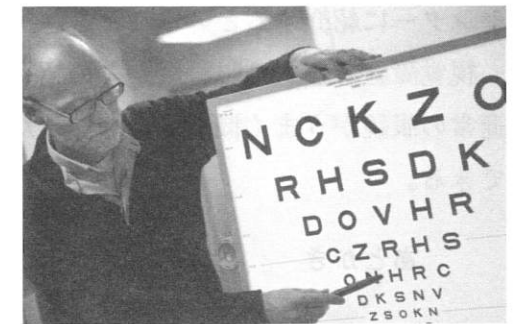


的な援助を供給し患者がビジョンセンターから援助を受けられるかどうか、どのような介入が最適なのかを評価する。もし最適な眼鏡での矯正視力が6/18(0.3)以上であれば、視力は良すぎるのでビジョンセンターからの援助を受けられない。

しかしながら、もし患者が援助を受けられる程度に視力が低下したならば、ビジョンセラピストは眼科医コンサルタントの助言のもとに、患者が助言を求められるか自宅の訪問を受けられるかの評価をするであろう。自宅への訪問ができる対象は、主に身体に障害があってビジョンセンターへの移動ができないか、装置の装着が必要か、供給された補助具教育が必要である市民となっている。

オプトメトリスト

市民が相談を受ける時には、たびたびオプトメトリッククリニックで始められる。ここでオプトメトリストは眼鏡の改良が必要かどうかを検査する。調査結果によるとビジョンセンターに相談で来所した人の40%は新しい眼鏡で視力の改善が見られた。事例の中にはデンマークの法律により眼鏡の助成金を受けられるものもある。それは非常に強い度数の読書用眼鏡、プリズムやフィルター眼鏡である。



ビジョンセラピスト

たとえ日常生活の活動に正しい眼鏡が不可欠だったとしても、補助的な他の補助具も必要かもしれない。ここでオプトメトリストの観点からは、ビジョンセラピストの仕事は視覚障害者にとってどの補助具がよいのかを調べることである。それぞれのビジョンセンターでは協力しているビジョンコンサルタントの助言で、患者が体験できるさまざまな視覚補助具がある。例えば、音声時計、音声読書器、作業用ランプがついている拡大鏡などがある。視覚障害者の助け

になる補助具は必要だけビジョンセンターから借りることができる。

視力がとても低下したならば、患者は交通機関や未知の環境で安全に移動すること困難が生じるかもしれない。ここで歩行訓練士が違った技術を教えることで、より安全で簡単に患者が未知の環境で安心して移動できるようにする。

ご覧のように、視覚障害者の生活に違いをもたらすのは正しい眼鏡、補助具、最適な教育支援間の相互作用である。視覚は人間の感覚の80%を占め、それゆえ視力が低下すると多くの方が生活の質が著しく悪化するの驚くべきことではない。視覚障害者にとっては正しい道具は毎日の生活をうまく機能させるには重要であるといえる。自立できる能力とそれゆえに他人に依存しないことは個人の自尊心を維持する中心的課題である。それゆえビジョンセンターが視覚障害者に提供する援助、必要であれば眼科医や眼鏡技術者が近隣のビジョンセンターに紹介するということが住民が知ることが重要である。

視覚障害者個人は眼科医からの紹介は必要ではなく、読書や近方視において通常の眼鏡がうまく機能しなくなったときには近隣のビジョンセンターで相談できる。

あとがき

デンマークは、北は海を挟んでスカンジナビア諸国、南は陸上でドイツと国境を接し、自治権を有するグリーンランドとフェロー諸島とともにデンマーク王国を構成している。2014年の国連世界幸福度報告では第1位であり、医療、教育費は無料で高福祉高負担国家である。

このたびデンマークのオプトメトリスト Peter Smaakjær氏にデンマークの視覚リハビリテーションについての寄稿をお願いしたところ快諾していただいた。元原稿はデンマーク語であり、英語に翻訳されたものをさらに日本語に翻訳して本稿となっているため、すべての原稿を掲載することとした。用語には注意したが、適切でない訳があることはご容赦いただきたい。デンマークを知る機会を与えていただいた Peter Smaakjær氏に深謝する。